

同人作品

未だ秋 秋山義仁

バス下りる知らぬ土地の路は土の色赤い花咲いているから住民は居るはず
山合のこの墓地住民の共同墓地よどこで死のうがここに来る

風車の回る夕暮は淋しそう漁火消えては入る漆黒

雪模様日々の暮しが降っている角の飯屋に客が四五人

サルスベリ似合うこの町赤白紫夏の三色未だ秋の中

人を見ぬ里歩き一時間咲ほこるサルスベリにも蔦からまる

人棲ます生気ない家に蔦はからまり白い花咲く

秋の陽の逃げ足速く残り柿カラスは枝から枝へ食べ尽す

空被う雲に狭められ陽はなし天を見上げる人の営みはない

この辺り鄙より季節の足速く既に雪降り雪垣ありて寂しい

ペルセウスの鏡 石邊綾子

俯いたままに咲きたる花なればわれの命の落ちるのを見よ
利休梅の白き花びら偽りの誓いにも似て小さく震え

丸窓に映るみどりのゆらめいて非日常の鶴巻の宿

丹沢の山裾に湧く湯をすくい若さともどもこぼれてゆけり

美しいままで仕舞えば白留は母の思い出ずっと消えない

三千の群衆はいま散り散りと渋谷の夜に熱気を残し

緞帳が降りて余韻もつかの間のうつつに撥ねるシートは赤い

「反乱のボヤージュ」かつての団塊の世代の人らと浸り新橋
駆け抜けて顧みることないままの砂漠にケシの青い花咲く

いくつもの虚構を越えて何かしら醸しておった我の上焦
リフューズのRに支配されながら人生最後の循環へ逝く
細菌で腫らした瞼の視野からもはみ出している忍耐の文字
ニューヨーク住まいを気取る芋虫は錬金術で蝶になるらし
メドゥーサの奢りは髪を蛇に変え貴女の奢りの代償はなに？

花 井上省吾

背が伸びたグラジオラスに支柱たて花を楽しむ赤白ピンク
咲きだしたマリーゴールド花盛り色とりどりの可愛い花が
水仙の花殻摘んで時期を待ち掘起してる球根たち
名に惹かれ百日草を植えてみた花殻摘めば次々と咲く
この夏は暑さ厳しく水やりも欠かすことなく面倒をみる

草取後花を植えよと考えて汗を流して体動かす

花を見て腹の足しにはならねども心満たされ満足度あり

花が好き何も云わぬがそれでいい心安らぎ穏やかになる

季節毎花を咲かせて楽しんで通る人にも心和ませ

美しく咲く花を見て感じるは心の中に美しさもつ

四季毎に花花花が咲き乱れそんな暮しを試してみたかった

ゲリラ豪雨 甲村雅俊

ゲリラとふ響きうたてしいつその事ゲリラ豪雨はスコールと呼べ

つまらないから安心でおもしろく読める短歌は疑はしくて

音もなく幕が下りればみな黙す夏の盛りに蝉が死にたり

取り替へのきかぬ家族になりたれば猫の寝息を立つる嬉しき

クーラーの動き続ける夏が来ぬゴキブリも蚊も姿くらし
夜もすがらクーラー動き金鳥の蚊取り線香つけられぬ夏
生き物が我の側から離れゆき二度と帰らぬ不思議なこの世
受け入れて幸せならば手をたたく国民総背番号時代

藤井^る瑠音^ねさんを悼む ― 愛の歌人 ― 中川宏子

人生^{ひとよ}とはひとつの帆船 晩年は帆を下しては波に漂ふ

瑠音さんの澄みし声音が耳奥に張りついてゐて愛を叫びぬ

詩人天沢退二郎の妻として支へつづけし五十年ありき

藤井とは彼女の愛せし旧姓と子の天二郎われに告げたり

「退ちやんの出会ひから自伝書いてるの」その声ははずんで走つて
深くふかく愛しすぎてしまったのと彼女のこゑが波立ちてくる

瑠音さんの描きし白黒イラストはしなやかに立つ長靴の猫
十一歳上の夫つまと出会ひしは瑠音さんまだ学生の頃
退ちやんと夫つまの名前を呼ぶときは甘やかになる瑠音さんの口調
純愛は死までも超えて旅立ちのお棺の顔は微笑みてゐる

この風 氷室敬子

短歌とは言葉が消える切なさよ私の言葉どこへ行ったか
良い短歌です良い文章ですぱとすには良い流れがあります
ぽん菓子屋ぽんぽんとふくらましおやつにする兄はぽん菓子職人
そうそうそうなんですよ暑いのは頭のうえに陽が来ているから
この風はどこから吹いてきた風か実に気持ちが良い風だ
この風はどこからきたのそしてどこへ心地良い風の流れがある

桜咲く四月六日に子の車に乗って一時間ほど桜の下へ
やすらかな眠りのためにさわさわと空腹を満たすお茶漬け食べる
爪を切りやさしき嘘のささやきに耳くすぐりて誘いてはみぬか

待ちわびて 本田洋子

吾が顔を鏡に写すシミ、アザ、ホクロ、あまりに汚なく夜に化粧する
熱中症、夏風邪との合併症起き上がれずに五日間伏す
中学生朝のバス停賑やかにやがて来たバスに吸い込まれ行く
雨が無く田んぼの土もひび割れて稲穂も枯れて米作深刻
夕暮れに日ぐらし一つ鳴き始む暑さの中で夏の終わりを
朝夕の興梔の声に耳澄ます秋の便りを待ちわびていて
興梔の鳴く声チリリン少し増え 暦の上の処暑の辺りで

朝食のトマトは日照りで青くなり　パッフエルベルのカノン聴きつつ
夕空を見上げて見れば薄いすじ雲秋の空とんぼの羽の
早朝の東の空に筆持ちでサッサーと描いたような秋のすじ雲
蟻さん蟻さん、この暑いのに冬の準備？　大きな餌を抱えて何処の家へ

来客

とり敢えず台風一過爽やかに晴れて残暑に再び出合う
目の前を塩辛トンボが飛んで行く　オーイ！トンボさんやつと会えたね
台風の後の風の心地良さ　午後は再び三十四度に
八月に孫娘二人やって来た宮崎から飛行機に乗って
高校生と十八歳仲良しで個性を持ちて成長して居り
優羽^{ゆう}は姉細やかな気使いできて私の手伝いしてくれし
妹は声優目指す高校生持ちたる夢を語りてくれし

東京は憧れの地今も昔も変わらずにコンサートにイベントに
若い人のエネルギーには叶わない良く食べ良く寝良く遊び行く
日程の七泊八日を全て終え急^せかされるよう羽田へ向う
孫達に励ましの言葉一つ掛けやれず八日馴んだ想いのみ残る

夏・晩夏・初秋 丸山 光

この暑さ八月まではと念じつつ念じ続けて九月も半ば
自らの弱さ・貧しさ知りながら他人のごとく自分を生きる
息子からいやみ嘆きを聞きながらパソコン操作教えてもらう
沈黙を通しながらも食いしばり前立腺にハリを打たれる
間違った思い出だけが歩き出し真実・事実がごったになりぬ
責任を取らない言葉の批評家を造りだしてネットの世界

生きるとはゴミを出すこと捨てること自分がごみにならないために
三人の老婆に値踏みされているあなたおそろしや夢といえども
帰省した息子が自由にすごす夏実家があれば帰りたい父
ドローンとはほんに悲しい武器なるか人を殺める痛みすらなく
この夏の酷暑の記憶は消えずしてなおわが内に夏は留まる
時空超えキミに届けとブランコを無心のままになお高く漕げ
演説で声を枯らして話すうち正義の人となりきる弁士
葉月尽き夏のおわりを惜しむよう太きキュウリが連なり垂れる
過去形ですべてを語る哀しさよ勉強できたハンサムだった
息子からあなたと呼ばれ戸惑いぬ文法的には間違いはない
お互いのXデイが重なって襦袢とる孫襦袢する爺
ああすればこうしておけばよかったと今日一人の悲しき夕べ

床の間の花瓶のごとくてを触れず妻とわたしは互いに生きる
穏やかな海辺で孫とすわりこみ過去と未来をともに見ている
入るなと結界しめす蟬の声ひとりもない夏の校庭
自我などは西洋思想のことばだと語りし人の強烈な自我
豊満な胸のあたりの十字架のきらりと光る夏の始まり
一分は六十秒でないことはデートをすればキミにも分かる
都では咲かぬであろう花なるかみやこ忘れがさきたまに咲く
思い出の品を処分す哀しみのそのプロセスも思い出となる
神さまにおまかせばかりのさ庭にも秋の兆しはすでに来にけり
もう一度初心にかえり心地よい心がわりの秋は爽やか